



寄稿者の代表として 「有明海異変」共著者 古川 清久 (自治体職員)

	IV 現代の十常侍、行政官僚を追放せよ！ (NO. 10)	1月号
293	絶望的ヒート・アイランドをもたらした無能な官僚国家 VI “異常な都市河川”	20070817
294	不知火海残映 10. 「鶴来山の冬」 吉田 耕一	20020101
295	夢すさび “球磨川河口と不知火海の遠い記憶” 八代河童共和国大統領 田辺 達也	20020801
296	環境保護派の値打ち “環境保護運動など止めて国家をひっくり返せ！”	20071115
297	犬の散歩ぐらいで糞を持ち帰らせるな！	20071115
298	(今月は原稿のストックがなくて休載です) ジャーナリスト 中原 孝矩 (元記者)	20060808
	*	
	■ 次回への予告 ■ ⑩	

293	絶望的ヒート・アイランドをもたらした無能な官僚国家 VI “異常な都市河川” 有明海・不知火海フォーラム委員会 古川 清久 (アンビエンテ編集長)
-----	---

絶望的ヒート・アイランドをもたらした無能な官僚機構 VI

異常な都市河川

最近の都市では目先の利便性ばかりが追求され、道路や地面がコンクリートやアスファルトで固められています。都市生活者の多くは、砂ぼこり、草むしり、溝さらえといったものを嫌がり、車が汚れるからと猫の額ほども庭の駐車場までもコンクリートで固めています。このことは雨が降れば一気に大量の雨水が都市河川に流れ込み、晴天が続けば一滴の水も送り出されないといった異常な状態をもたらしているのです。

これは土壌流出の問題だけから見れば問題はないと言えるのですが、河口周辺の水温や塩分濃度に急激な変化を来していることは否めないでしょう。当然河口周辺で生息する魚や海と川を移動する種類の魚、とりわけ稚魚には適応能力を超えるレベルで負荷がかかっている恐れがあります。また、塩分濃度との関係からも稚魚からノリ養殖にとってもデリケートな脅威になっています。

雨水を一気に河川に流し込まないようにするためには、まず、雨樋から分流する形で防火水槽を兼ねた貯水タンクや小規模な地下タンクを整備し（ポウフラが湧くという向きには金魚かメダカを入れましょう）、側溝にも穴を空けて地下に浸透させながら流すべきで

しょう。また、駐車場にしても地下浸透型の舗装にするとか（これには金が掛かるのでレンガや木切れを敷き詰めて隙間から地下に浸透させる構造にしても良いのです）、庭にも芝生ではなく樹木を植えたり、また、すでに樹木に覆われているところではそもそも切らないといった配慮が必要です。



▲ 一般的な都市空間

生活排水による負荷の増大

さらに、これはあまりにもあたりまえのことであって、あえて言うまでもないことです。ゴミはもとより入浴剤や油、石鹼、塩素系洗剤など、海にとって負荷となるものは極力減らす努力をするべきでしょう。

昔の食生活は極論すれば「一汁一菜」で、値段の高い油などはほとんど使われませんでした。このためにタワシや切藁（タワシが登場する前の稲藁でこさえた食器洗い）があれば食器は洗えたわけで、洗剤など使う必要もありませんでした。従って生活廃水をそのまま流しても川には塩や灰ぐらいしか流れ込まなかったのであり、「三尺下れば水清し」という川と人との関わりがあり得たのでした。今となっては元に戻ることは不可能ですから、これからはこのようなライフ・スタイルの変化による自然への負荷もボディーマスター・ブローのように効いてくることでしょう。

だんだん絶望的になってきましたが、それでも下水道をやめて合併浄化槽に切り替えることで最小限、都市の川は本来の姿に甦るはずですので、浄化槽設置のスペースが確保できるところではこの面での整備を急ぐ必要があるでしょう。

これは都市河川のあり方に関して書いたものでしたが、ヒート・アイランドの側面から見るとこれらの一部が都市の気温上昇に関係している事は言えるでしょう。

こんなことは、考えれば直に対策は取れるはずなのですが、彼等は利権のためだけに動くのであって、国民とか住民のためどころか国家のためにさえ動こうとはしないのです。



▲ 鶴来山の冬 (Copyright Koichi Yoshida 2002)

私が昭和32年、初任として計石小に赴任した時、ここには分校があり、それは正面の山のちょっと右手中腹あたりに建っていた。この入学式に出席し、式後の祝宴でもてなされたが、並べられた海の幸・山の幸や対応する人々の所作に、私は息をのむ程の感動を覚えた。決して贅沢とは言えないが、身近な自然がもたらしてくれる新鮮な豊かさ、その自然と一体となって生きている人々の心使い、それが理屈抜きに私の心を直撃し私の心をゆさぶってしまった。「私もここに同化したい」。その時、そう思ったのは、私の動物的・本能的なインスピレーションだったと思う。

しかし今、私の目の前に広がる海は、私のそのような思い入れを、浅はかな夢だとばかりに厳然と拒否している。海よ、いつ心変わりしたのか！『いや、私たちは何も変えてはいない。何億年も前から同じことをくり返しているだけだ。ただ、人間が何をしようと、やったこと全てをだまって受け入れて来ただけだ。それでもなお変わったと言うのなら、それはあなたたちが変えているのではないか』。波音と共に、風がこのような海のメッセージを伝えてくる。

今は冬場。海はわりと穏やかで潮の動きも悪くはないが、遠望する鶴来山の港からは、漁船が漁に出たという気配は、今日も感じられない。(文：吉田耕一)

「あなた、あなた」の声と体を揺する動きに目を覚ました。

「寝言で笑ったり、怒ったり。おかしな人……。」

川と海の夢を見ていたのだ。大鞆樋門（オザヒメ）と江中（エナカ）、前川橋付近、南川河口と三江湖（ミツエゴ）沖、北新地沖など、八代の川と海の情景がめまぐるしく現れては消えた。子供も大人もそこで泳ぎ小魚やシジミ貝をとりウナギ塚をめくり青のりをつみ車えびを搔きハゼを釣りアラジャクを踏んでいた。ひとつまみの塩でマテガイと、猫じゃらしでシャクと知恵比べをしていた。

夢の中の私は少年だった。少年になって遠い記憶を追っかけていた。

—それにしても何に笑ったり怒ったりしたのだろうか？

夢は大抵すぐ消える。思い出しても切れ切れ、ぼやっとしてちぐはぐだ。

■ 大鞆樋門

八代郡千丁村は東の山麓から西の入り海まで伸びる平坦地で、戦中の一九四〇年代はじめ、面積一千町歩（一町は1ヘクタール）戸数一千戸人口六千人の大農村だった。イ草・畳表の特産地として知られており、母の縁者（祖母や叔父叔母いとかハトコ）がこの村にいっぱい住んでいた。祖母の住まいは国鉄千丁駅から一里（4キロ米）ばかり下った新地うち、五六十戸の集落のまん中にあった。十九世紀半ば（安政時代）に干拓された催合新地の一部、30ヘクタールである。地元史（八代新地小史85年刊）によると、最初の入植者は一八六一（文久元）年十四名になっている。

ここは不知火海から遡上する幅三十米・流路四キロ米ばかりの細長い入江の奥にある大鞆樋門群の南の端っこで海ともつながっていた。三枚戸とか七枚戸とかいう五つの樋門の辺りには僅か数戸だが漁撈を専業とする人のくらしもあった。樋門北向いの集落は文政村である。

大鞆樋門の由来は、十九世紀初頭（文政年間）の干拓事業（四百町開きといわれる大牟田新開）の潮止め堤防にとりつけられた大樋門が堂々たる大鞆で、堅固な石鞆（海水の水圧に耐えられる巨石づくりの石垣工法）から「大鞆」と呼ばれるようになったという。干拓労働と悲恋の民謡『大鞆節』は売れっ子芸者、赤坂小梅のレコード（1965年）で全国に普及した。地元では「おざや」と呼んでいた。

一九三三年熊本市生まれの私は、小学校に入り夏休みになると千丁村へ汽車で一人旅して、ひと夏まるまる田舎で過ごすようになった。

田舎には血縁の温もりとやさしさがあり都会の子は誰にでも珍しがられる。在の子はみんな親切だった。私はにわかに増えたいとかハトコの後にくっつき、馬入れ川の石垣の透き間にドンカッチョを見つけ樋門に下る川筋で大粒の淡水シジミ（マツジミ）をさぐりハヤ（鮠、田舎ではハエと言っていた）を釣り堀割で小鮎を追った。朝早く、鮎かごやウナギかごの引き上げにもついてまわった。一日じゅう川のどこかで遊んでおり、そのうち泳ぎを覚えるのだった。雨が降ると建屋回りの石垣から赤み鉄紺色の甲羅をまとった弁慶ガネ（蟹）がごそごそ道端にはい出し泡をふく。田舎では何でもない光景が都会の子には不思議な遭遇だった。バケツをもってガネをとる。

二学期の登校日、私はみんなに十分自慢できるくらい甲羅が何枚も剥けて赤銅色に光っていた。そのころ色白の少年は決して自慢にならない戦時下だったから……。

こんな夏休みは長つづきしなかった。一九四一（昭和16）年、太平洋戦争が始まり、結婚間もない叔父たちにも再び令状が来て次々に戦地へ向かった。父は翌年死亡した。

■ 前 川

八代市内を貫流する球磨川の支流のひとつ前川は、もともと湾状の入り江で天然の舟泊だったが、細川時代、上流域が開鑿されて本流とつながった。開鑿された水路は新川（徳淵川）と呼んでいたらしい。

どこまでが川でどこから海なのか？ 河童渡来の碑の立つ中島町や藩制時代海の番所があった徳淵町を中心に、川上は遊廓の紺屋町あたりから川下は住吉竜神さんの船大工町と蛇籠の港あたりまでか、新川の千仏から萩腹鉄橋下る敷石あたりまでを含めて言うのだろうか。前川の流路は4.6キロ米になっている。ここは海水と淡水とが混じり合う汽水域、汐の満ち引きのたびに海と川の魚が入れ替わって游んだ。前川橋あたりは禁魚区になっている。川底の魚群が鉄橋から透きとおってみえた。

左岸寄りに石原が数百米のびて中川原、その下方によし原の長い帯も遠望できる。冬場、石原に竹竿が立ち細縄が張られ青のりが川風にはたはた揺らめいた。流れにそって大きい栗石を小積んだウナギ（鰻）塚が行儀よく連なり、川面には朝方薄霧がたちこめた。浅瀬では木製の砂利舟が小さな錨を下ろし、腰まで浸かった川の男たちが金網をたぐってバラス（小石）をとっていた。

小学生の夏は日がな一日川べりに遊び、びくつきながら鉄橋の欄干から突っこんだ。徳淵の堤防から中河原まで直線で五六十米はある。速い流れの引き潮どきに向こうへ渡るのは大変だ。ピア（橋柱）からピアへピア伝いに渡った。しかし今は塩水の遡上がすすみカキ（牡蠣）の殻が付着して危ないので子供ばかりか大人も泳げない。

昭和の一九三〇年架橋の前川鉄橋は今ではバイパスになって人と自転車専用の道である。当時は最先端の技術・ハイカラな容姿で注目されたにちががなく、長いこと市央と農村のかけ橋になってきた。戦時中グラマンの標的にもなったので弾痕も残っている。一九四四（昭19）年の大洪水で橋げたが倒壊、復旧までのしばらく徳淵の番所あとから対岸に渡し舟が出たこともある。徳淵の津の鼻の魚市場では夜明けとともにセリが始まり、仲買人の威勢と喧騒が景気よくこだまする。大榎のつき出た堤防うへの朝市食堂からは湯気が立ち、みそ汁の芳香が路傍をくすぐった。

八代の寒の恵み・寒の風物詩はウノ貝とウノ貝売りの長蛇だった。よほどとれるのか、海浜の鼠蔵（ソウザウ）や水島あたりから片道4～5キロ米はある市央の町なかへ向かう姉さん被りの一群は波打つように次々につづいて早朝の壮観だった。天秤棒とウノ貝目籠（メコ）が軋んで揺れ、白い吐息の女たちは汗ばんで紅潮している。処女会衆には逞しさ（パワー）と美しさ（ミス）があった。

それにしても、八代海ならではのウノカイは一体どこへ行ってしまったのか、それとも絶滅したのか？

この数十年、見た者も食した者もない幻の貝なのだ。漁協や市役所にもたずねたが確たる答はなく誰もが頭をひねった。

夢が覚めたら考えてみよう。



▲ 現在の八代球磨川河口

■ 南川河口と三江湖・鼠蔵沖

球磨川と不知火海は河口の南川橋あたりで干満のたびに激しくせめぎ合い、あるいは穏やかにゆっくり逢瀬を楽しみながら玄妙な汽水域を生み育ててきた。川の流れは、左岸の三角洲（金剛村弥次＝ヤツギ地区）の葭牟田（ヨシムタ）から北原に沿ってゆるやかな湾曲を形成し海へ広がり、そのふところは自然の可愛い舟泊りだった。弥次地区は約120ヘクタール。ここは十九世紀（天保から慶應まで）6回にわたり造成された新地である。装飾古墳群や新婚時代の高群逸枝でも知られている。

敗戦の年、中学一年生になった私は市内徳淵町に下宿していた。授業はほとんどなく、軍事教練の他、陸軍省のアルコール工場や山間部の炭焼きなど転々動員されたあと、南川河口左岸にあった海軍省のヒューム管工場で終戦を迎えた。

工場の回りには稲田が広がり灌漑用水池の堀割が点在していた。工場の横に清流の南川があった。この川は戦前はもとより戦後もしばらくは球磨川本流として西へ真っ直ぐ流れ海へ注いでいた。しかし戦中からの旧南川（現球磨川）改修と、一九七〇年代後半、八の字堰（八の字橋）の築造で、流れは植柳橋から左へ蛇行して南下するようになって本流のはたらきを失い、入江状の支流（流路2・2キロ米）に変化した。

学校が夏休みに入ったので南川と堀割で魚とりと遊泳が日課になった。川べりには前川と同じウナギ塚が並んでいた。近在の農家が農閑期にこつこつ塚を積み上げてきたものだ。私は塚の栗石を初めてめぐり、でっかいウナギ鉋を使った。箱メガネでのぞくとハゼ（沙魚）やダクマえび（ワガエビ）もいた。流れのゆるやかな浅みや中洲のよし原にもぐる。箱めがねとエビ網があればダクマが向こうから飛びこんできた。

干拓地の堀割は灌漑用水のため池として機能している。弥次地区の堀割は干拓以前の入り江のよどみ「えご」か引き潮どきの「みお」筋の名残りだろうか。大小いくつもあり、フナ（鮒）やタイワンドジョウ（雷魚）の住み処だった。戦後の圃場整備で今は跡形もなく村の古老さえも忘れかけている。ナベワリ堀・ドガン堀・サイキ堀・サツチ堀、いろんな名前を聞いている。

■ 終戦前後

八月九日、長崎の原爆をここからみた。終戦の二日間を簡単に記しておく。

十五日、弥次分教場ちかくの堀割で朝から鮎を釣った。お昼まえ工場へ帰る途中の葭牟田で、そろそろ東へ向かう爺さま婆さま、おぼさんの固まりに出会った。私はその固まりに牽かれるようについて行った。集落の中ほどに弥次神社という氏神さん、その前に青年小屋と火の見やぐら。そこにみんな集まりラジオの前に坐った。放送が始まったので静かになったが雑音ばかり、すぐ工場へ戻った。

翌十六日払暁、軍の監督官と家族の乗った海軍省のチャッカー船に便乗、蛇籠港で降りてもらい、徳淵の下宿へ帰った。工場ではその日から朝鮮人労働者の食料よこせの激しい交渉が始まりしばらく騒然としたようである。握りめしの包みと焼玉エンジンの響き、焼玉の熱でパックリ口を開けた大ハマグリの味を思い出す。

もとに戻って、弥次地区西方の不知火海域を埋め立て農地に供用する国営金剛干拓（現・南北2つの平和町、425ヘクタール）が始まったのは、戦中の一九四三（昭和18）年、入植は戦後の一九五三（昭和28）年である。

この年の夏、球磨川河口の海浜へ何度も行ったので、夢の中でも遠浅の風景と感触がくっきりよみがえる。三江湖（ミツコ）か鼠蔵の堤防を下りると地先2キロ米ばかりの沖合いにケンチイシ（間知石）を敷いた石塁の帯がみえる。潮止堤防工事の捨て石である。子供はそのまわりでマテガイをとるかアラジャクを踏むか、小さな石垣をめくって渡り蟹（ガザミ）をさがした。米軍機がここに不時着したので大騒ぎになったこともある。乗務員はどこへ連行されたのか？ 『海と毒薬』のマルタになったかもしれない。

マテガイ（馬刀貝）は不知火海域の干潟にはどこにでもおり、塩さえあれば貝との知恵比べが楽しい潮干狩だった。8の字を描いた小さな穴に塩をひとつまみ入れると、長さ十センチばかりの筒状の貝が縦穴から飛びだしてくる。満ち潮と勘違いして顔をだすのだ。その瞬間を捕まえるのだが、タイミングを外すと、だまされたと逃げ足は早い。子供でも二三十本はとった。たまに偶々大マテというジャンボに当たって大威張り。

アラジャク（シャコ、蝦蛄）も嬉しい漁（スト）りだった。引き潮の泥砂に丸い穴が無数に見える。2センチばかりの円は澄んでいた。狙いの穴を踏むと別の穴から水が吹きあげる。二つの穴はつながっているのだ。穴は深い。子供の片足は股（モ）のあたりまで沈んだ。何度か踏むと反対の穴から体長15センチばかりの鳩羽色した平べったい生き物はい出してくる。

ギザギザの甲羅に身を固め、頭の両端からカマキリの鎌をふりまわし、曲げた体をバネに飛びはねる。異様な容姿は魚貝というより動物である。十匹、十五匹はとれた。ぼくらは湯がいて食べた。固い殻に箸を突っこむとうまく身が離れる。シャコが鮎ネタになっていることを知ったのは、アオヤギと同様、一九五〇年代の東京である。タレを塗ったシャコ鮎は実にうまい。八代ではなぜ鮎ネタにならないのか不思議だった。

大人たちは更に1キロばかり沖へ下って、みぎわ（汀）の砂浜で「エビ搔き」だ。「エビ搔き」は鉄製の歯を横ならび櫛状につけたシンプルな漁具で引き手の長柄がついている。それを砂浜に沈めて後ろすきりにゆっくり搔くと、青みがかって薄茶色、横縞模様の車えびがピンピン跳ねる。褐（か）がえしのガザミが大きな鉋を精いっぱい広げ威嚇しながらすたこら逃げる。タイラギが櫛の歯に引っかかり「カリッ」、微かな音をたてると歓声をあげた。

斜め前に大築島や黒島が横たわっている。大人なら泳いでも行けそうだ。

「エビ搔き」は各戸にひとつふたつは持っていた。農家では潮目を見ながらエビ搔きをかつぎ連れ合い海へ向かった。

■ エナカと北新地沖

地元では大鞆樋門から海域までの細長い入り江を「大鞆川」、灌漑用水の落ち水や生活排水が集約されて樋門に達する川尻の游水域を「エナカ」と呼んでいた。大鞆川の流路は1

3・1キロ米、この数字は淡水域（河川水）と鹹水（汽水）域（海水）を合算したもので、夜狩（やり）川、弥勒（ミロ）川、島崎川を合流して不知火海に注いでいる。川尻の游水域をなぜ「エナカ」と言うのか、子供のころは考えてもみなかった。

その「エナカ」だが漢字では「江中」が似合う。八代生れの医師上野四郎さんが熊本の同人誌『日本談議』（76年）に発表の《大鞆名所》によると、引き潮どき川尻が伸びて干潟の中に流れをつくる「潟川、江川」と同じ意味をもつという。樋門のなかったころ大鞆川には大小の濤（ミ）すじ模様がたくさん見られたと思われる。

樋門は汐の干満を利用して開閉する自在弁である。門扉は引き潮に開き江中の水を排水し、満ち潮になると閉まって田畑を塩害から守っている。不知火海の干満は激しいので干潮の大鞆川はミオ筋を残して一面干潟になり、満潮時の潮位は3～4mにはなる。大鞆には五つの樋門に二十枚の門扉がある。これが閉まるまで海水がゆっくりエナカに入って淡水と混じる。汽水湖はこうして生まれたのだ。

満ち潮に乗って下あごの長い、青みに透き通ったサヨリ（細魚）が近寄ってくる。堤防のハネから飯つぶを流して五、六匹は釣りあげた。薄茶まだら胴長のマハゼ（沙魚）は一時間もおれば十五六は釣れる。頭でっかちの虎ハゼもかかった。ハゼはいやしいのでシジナ（ゴカイ・沙蚕）やテグス（点蚕糸）など上等はいらない。堆肥小積みのシマミミズに食らいつき、釣り糸も紡績糸でこと足りた。

干潮時の泥干潟ではギョロ目のムツゴロウが愛嬌を振りまいている。アサリ（浅蜷）は多すぎてもて余す。赤い舌のバカガイ（馬鹿貝）は見向きもされず、なぜか誰も食べようとしなかった。アオヤギ（バカガイのむき身）という寿司ネタになっていたことを知るの是一九五〇年代、東京ではみんなよく食べていた。堰のまわりにチヌ（クロダイ）の子やフグ（河豚）もやってくる。フグには針ごとしよっちゅう切られた。

ダクマエビ（テナガエビ）は汽水域の石垣やよし原の根っこにいる。ミミズで釣ってもよし手探りでもよく、味噌漉しに軽くいっぱいとれた。流線形のハヤ（鮠）は馬入れ川の筋や昭和用水（東部山麓から西方の干拓地農村に伸びた灌漑用の幹線水路）で、特に雨あがりの薄い濁りによく釣れた。餌は蜂のさなぎが最高だが蠅でもよかった。

大鞆の恵みは青のりとシジミ貝だろう。冬場の寒流に青のりがそよぐ。干潮時の樋門あたりは足首ぐらいまで水が引き石原が顔を出す。子供はすびくような冷たい流れに素足で入り手足を真っ赤にしながら潮間に摘みとった。大人は農作業の合間、エナカに小舟をだし竹竿の先に針金をつけた手製のノリ搔きで深みを手繰った。夏場のエナカはヤマトシジミ、潜って砂地をつかむと手のひらにざくざくの感触だ。おいしいのでよく売れる。升売りの行商でいい稼ぎになった。

夏から秋の北新地の海はエビ搔きとシャク（穴じゃこ）とりでにぎわう。大鞆川堤防ぞいの熱砂を、エビ搔き担ぎ魚籠（けりかご）片手に、はだしで歩いて一時間、塩浜から貝洲を経て北新地の西端に出る。北の新地（現八代市鏡町北新地区）も近代（大正時代の1926年）の干拓地、面積は687ヘクタール。戦時中は軍に収容され飛行場になった。

引き汐もそこそこ、堤防を下りて腰水に「えび搔き」を浮かせ我こそはと沖のポイントを競う。地先から1キロ～1・5キロ米ばかり、三角半島が目の中のなぎさ（渚）で鉄の櫛を沈めて搔くと、車えびなら長さ20センチ、渡り蟹なら幅15センチばかりの上物を十四五匹、貝殻の長さ20センチを超えるタイラギなら二～三本、巻き貝のさざえも四～五個はとれた。車えびは干し上げ祭りか正月用に大事に保存された。

シャクの漁季は秋口だったと思う。おなかに卵を抱えて丸々太ったシャク釣りもおもしろかった。シャクは深い穴をつくって棲んでいる。ここでは猫じゃらし作戦が始まる。子犬か子猫の尻尾に似た雑草の猫ジャラシ（狗尾草）か毛筆をおとりにおびき出す。猫じゃらしを侵入者と勘違いして押しあげ頭を出したところをつかまえる。猫をじゃらすのでは

なくシャクをじゃらしながらの知恵と遊びの捕物だった。子供でも50ぐらいはとったから大したもの、ベテランの大人は一分に一匹のハイピッチで150は釣りあげた。

■ 夢から覚めて、ウノカイはなぜ消えた？

「ウノカイ」とか「ウノキャア」はヤッチロ弁のようである。「ウノカイ」では図鑑に出てこない。教えを乞うたら「オオノガイ（大野貝）」ということだった。灰色がかった長卵形の二枚貝で、親貝になると殻の長さ十センチを超えてずっしり重かった。県内では主に不知火海域に生息し冬場の泥干潟に湧くように生成したので、間違いなく八代の海から「サバエなす」格別の贈りものだった。吸い物によく味噌汁にもよかった。一文字ねぎと酢みそにも合った。食糧難の戦後、天日に干してスルメ状にして食べたこともある。深く掘る苦労はあったがよく売れたので農漁村のいい稼ぎになったようである。

しかし　ウノカイさんよ、おまえは一体どこに消えてしまったの？

この疑問は目覚めの後により深くなった。

似たような激滅または絶滅危惧の現象は浅海・潮間帯に生息するすべての魚貝類、たとえば前出マテガイ、アサリ、タイラギにも、ハマグリにもいえるが、それにしてもこの数十年ウノカイの姿を全く見なくなったのはなぜか？　市の水産課と環境課、漁協の職員さんと話し合っ得た結論は、絶滅したか絶滅に近い悲運だった。

ウノカイはなぜ消えた？　生息環境の悪化によるもので、干潟面積の激滅が魚貝類の生態系に決定的な影響を及ぼしていることを環境省も認めている。環境省自然環境局の『いのちは創れない』（02年刊）は、戦後（一九四五～一九九四年の半世紀）、日本の干潟が約四割（2万ヘクタール）消滅、今なお止まらなると報告している。

八代ではどうか？　戦後の五十年間、氷川町の砂川南端から日奈久町まで約30キロメートルの海岸線で1400ヘクタール消滅した。農業用途の干拓950ヘクタール、工業用地と意味不明の埋め立て450ヘクタールである。町村合併後の新八代市の干潟3100ヘクタール説から察すると答えは明らかだ。

徳川時代は新地造成の時代といわれた。十七世紀から十九世紀の三百年、肥後藩（細川・松井氏）の手がけた八代（市郡）の干拓（埋め立て）は三千ヘクタールと推定できるが、戦後は徳川時代の三倍のスピードで進行している。徳川期と戦後の投資思考と効果も違う。前者は米麦の増収という明確な目標を掲げ実利実益の成果を挙げている。後者は不要不急・目的不明の政治的埋立が多く、税金の無駄づかいと汚職腐敗の温床になっている。かって市長選（開発競争）の落とし子・日奈久地先の埋立（33ヘクタール）など愚策も極まっております、八代市は何十年も塩漬けのあと、貧すりゃ鈍する、ギャンブル場（場外馬券売り場）転用へ最悪の選択を重ねようとしている。

浅海域の消滅は現在進行中の大築島周辺の埋め立て（1・2期工事・計80ヘクタール）からも説明できる。「海の保育園・天然の漁礁」といわれる不知火海域最良の藻場を何百億円もの税金を使ってぶっ壊し、ここを県内の産業廃棄物投棄場にする面妖な公共工事が長年にわたり強行されている。

このような浅海・干潟の消滅と海の墓場化のなかで、ウノカイに限らず魚貝類の激滅・絶滅は起こるべくして起きる。

■ 渡り鳥も同じ運命！？

関連して、日本では野生生物3800種が絶滅危惧種（レッドデータブック、RDB）に区分されている。熊本県でも独自に「レッドリストくまもと2004」として1450種を抽出している。

そういえば夢のなかでも夏の海岸や干潟にはいろんな鳥がでてきて楽しかった。白い羽根に黒い足と長くちばしのサギの仲間たち、黄色い足と黒いくちばしに特徴のシギ、カモメに似た水鳥たちも、人間とつかず離れずのところにおいて餌をついばみ、人間の歩幅に合わせてびよんぴよん遠ざかるかまたは近寄るといふ具合に、お互いの領域を侵さず上

手につきあってきた。球磨川河口のはなしから、シギ・チドリ類で40種、このほか50種類の野鳥というから、八代の干潟はかって渡り鳥・野鳥の天国だったのだ。

少し古い資料、八代教育研究所の『ふるさと八代 一球磨川（68年版）』によると、野鳥の観測で一九六四年、新産都市八代市指定を受けて始まった不知火臨海工業用地造成の埋め立てとその後に注目している。一九六八年は第3工期（埋立）の終わったころ、「工事の進行で、水場が消えて、休息や餌場としての機能を失い、野鳥の飛来が激減した。」「造成工事、環境の変化が影響を与えたものと考える。」そればかりか「干潟や河原の減少はその場所の飛来状況に影響するばかりでなく、他の場所にまで影響することが考えられる」と気がかっている。参考までに、臨海工業用地造成は1～3工期で推定約190ヘクタール、その後も埋め立てはつづき国営県営併せて400ヘクタールを超えている。

鳥も魚貝と同じ運命にあるのだ。

不知火海の異変は、浅海・干潟の激減のほか、ダム問題で揺れる人吉球磨の山林の荒廃、東岸線に張りつく化学系大企業群の工場排水による海洋汚染、地下水の大量くみ上げで伏流水の枯渇、農薬・化学肥料や生活雑排水の影響等々もあろう。

我々の生産活動、日常生活のありようを、ここで立ち止まってじっくり見直す必要に迫られているように思う。

二〇〇七年七月

* 干拓・埋立の記憶

1953年	金剛干拓（現在の南北2町）	425
	弥次村（明治初年～22年）、金剛村弥次（明治22～昭和29年）	
天保8年	植柳高下差樋鷗須新地	17, 8
天保13年	葭牟田新地	38, 2
弘化4年	沖の洲新地	30, 1
安政2年	三江湖新地	20, 7
安政2年	北原新地	9, 2
慶応元年	三江湖築添新地	0, 9
		116, 9
1964年	八代港工業用地（新港町）	355
	埠頭用地	61
	加賀島地区（港町）	111
	大島石油基地（大島町）	15
1867	日奈久埋め立て	33
進行中	大築島埋め立て	80
	計	1080

大鞘樋門

石造り1919年（文政2年）4百町開きの大樋門

夢すさび “球磨川河口と不知火海の遠い記憶”の掲載について、

アンビエンテ編集長 古川 清久

久々に大統領から原稿を頂きました。内容は文句のつけようのない素晴らしいものでした。この貴重な記憶が生かされ、いつの日にか八代が元の美しさを取り戻すことを願うものですが、恐らく無理でしょう。

さて、田辺さんの文中に“処女会衆には逞しさ（パワー）と美しさ（エロス）があった。”というフレーズがあります。この「処女会」という言葉が完全な死語になっていますので、

多少のコメントを付け加えさせていただきます。かく言う私もこの言葉を生きた会話の中で聞いたのはかれこれ十年以上前の佐賀県の山村の七山村辺りで一度あるだけで、以後は一度もありません。

この組織は国防婦人会や愛国婦人会が跋扈する以前のもので、戦意発揚といった国策からある種無縁であったため戦後まで命脈を保ちますが、戦前の青年団運動の女性版と考えるのが一番分かり易いかと思います。詳しくはインター・ネット等でお調べ下さい。処女会という言葉が使われたのは、戦後の青年団に男女が統合されるしばらくまでの間、凡そ昭和三〇年代までと理解しています。このため、六〇歳代以下の方にはなかなか分からないかも知れません。

296. 環境保護団体の値打ち

“環境保護運動などやめて国家をひっくり返せ！”

環境保護団体と称せられる漠然とした組織、グループがありますが、その組織は一様ではありません。

いわゆる既成政党の選挙カンパニアのためにその一点だけで組織されたもの、もはや資本と対決する意志など全くないダラ幹どもの労働組合がポーズをとっているだけのもの、かつては真面目な姿勢を維持していたものの、国家的支援を受け入れて事実上のイエスマンに成り下がった“日本〇鳥の会”、河川行政などの延長で捏造し、また、新たに取込んだ多くのNPA法人、農水省、国土交通省などが環境を守ると称して各エリアで組織した税金の掠め取り団体、環境関係のシンポジウムなどに群れ集う御用学者や行政に追従する研究者や環境運動家など……枚挙に暇なしといったところです。

もちろん、室原さんの下笠ダム反対闘争、水俣病を巡る命を掛けた闘い、諫早湾干拓事業反対の闘いなど、真実を追究する闘いがあることは十分承知していますが、大半の環境保護を叫ぶ団体や運動の多くは行政機関への“取り入り”や“擦り寄り”の要素が強く、この手のものがどのような役割を果たすかもはや明らかでしょう。

環境問題に関心を持つ人々が、環境とかエコロジーといった耳に優しい囁きに引き寄せられただけで、行政は“環境を配慮して事業を進めています”と宣伝するのです。

まあ、簡単に言えば利用されているだけで、環境を考えるとどこかむしろ“環境を考える”ある種のソフト事業の乱発にさえなっているのです。もはや環境を掲げた新種の無駄な公共事業が創られてしまったことにもなっているのです。

さて陳情型の環境保護運動が登場した背景を考えてみましょう。

私は革新自治体といった見せ掛けだけの革新性が受け入れられた時代があったからと考えています。

そもそも、この“革新”というあいまいな言葉は戦前は右翼が使ったのですが、まあ、脇道に入るのはやめておきましょう。私は革新自治体を評価した事も、ましてや期待した事も全く無い人間で、以前からこの革新性の虚構を宣伝した連中は所詮は資本主義社会の一翼を担う体制派としか見ていませんでした。

ところが、この見せ掛けだけの革新性に惹きつけられた人々がかなりいたために一時期全国で革新自治体なる奇妙なブルジョワ地方権力が拡大したことがありました。この時代、地方権力のウイングを広げるために環境問題に配慮し多少はその手の団体の言い分を聞いたふりをする傾向があったのでした。この延長上に生き残った各種団体も今や展望を失い、本質的な対抗軸を形成できず墮落していったのがこのテイタラクをもたらしたとするのは言いすぎでしょうか。

水俣病、エイズ、フィブリノゲンといった犯罪は等しく国家権力が何者かということを実に示し続けました。官僚と資本と糞政治家それに協力する大半の御用学者ども、これらを徹底的に追求し国家権力を揺さぶり本質的な社会変革をもたらすような運動との連携なくしては環境保護運動は必ず墮落し決して永くは生き残れないことは明らかなのです。

環境問題を考える上で最も重要な事は、まずは、魚道が造られたから安心だなどといっ

た素朴で単純な考え方を棄てることでしょうか。魚道はある種の魚を救済するでしょうか、ある種の魚を排除します。同様にある一定の年齢の魚は救うでしょうか、ある年齢の魚を排除するでしょうか。従って、行政が造る目眩ましのようなそのような表面的な小細工を見破り、その本質を理解し、対決できる力を持たなければならないのです。

297. 犬の散歩ぐらいで糞を持ち帰らせるな！

物質循環が分かっていない

“農耕用牛馬が消えて都市住民のエゴが幅を利かせる時代が来た”と言えばそれまでですが、いつの頃からか“犬の散歩ごときで糞を拾うのが愛犬家のマナー”とか“散歩をさせるのに糞を処理しない常識のない人”などといった馬鹿げた風潮が蔓延するようになってしまいました。

もっとも、それに無抵抗に順応する者も愚かであれば、それをあたりまえの事でもあるかのように声高に要求する者も愚かとしか言い様がありません。

まず、このような風潮がはびこった背景には空地の減少、道路の舗装化、里山の破壊が著しく進んだことが考えられます。

半世紀前までは大半の道が舗装されておらず、農耕用の牛馬が普通に町中を歩いていましたし、当然に糞は蒔き散らされていました。そこまで遡らないまでも、しばらく前までの散歩道にはかなりの土の部分が残し、雑草が生え、草叢も多かったために、犬もその中で用を足し、人はむやみにその中には入らなかったことから、見た目にも気にならず何の問題もなかったのです。

ところが、周りから畑や家庭菜園が消え、全てがコンクリートやアスファルトで舗装されるようになると、それを文明的と考え始めた鼻持ちならない馬鹿女どもから、うちの庭だけに糞をして困るとか、“糞公害”だの不衛生だのと訳も分からぬ誹謗が始まったのです。

くだらない議論には当然に穴があります。そもそも、糞はいけないが尿はしかたがないというのも不思議な話で、犬の糞は避難されるものの、散歩に連れていかれない（普通はそうでしょう）猫はお咎めなしですし、鼠や昆虫はどうなのでしょう。

確かに鳩や烏の糞公害は問題とされていますが、全ての動物が排泄というものから無縁ではなく、これがあたりまえに散布されているのが本来の自然であり、地球上の摂理なのです。犬の糞公害を大騒ぎする都市の大馬鹿女どもは自分自身脱糞しないとでも言うのでしょうか。

木の葉が枯れて地表に降り、腐葉土となり、土に戻り、再び栄養となって樹木や草花に還元されるから永遠の自然が保たれていることと同様に、パンや米といった植物起源の栄養物を摂取した犬が草叢に糞をすることによって、結果として栄養が還元され植物が再生し続けているのです。

この程度の事も分からない馬鹿女どもが“自分の芝生に隣の犬の糞が落ちていた”とか、“私のチューリップのお花畑によその犬の糞が落ちていた”などと大騒ぎして、行政も“公園で犬の散歩をさせる際には糞を回収しましょう”と責任逃れのような対応をしているのです。

私自身はいわゆる猫派であって犬を見ても何の喜びもないのですが、この犬の糞へのいたずらな中傷だけは許せないと思うものです。

およそこんな連中の言うことには一片の真理もないのであって、馬鹿女どものガーデニング箱庭や小奇麗な西洋猿真似庭園などなど全部枯れてしまえ！と考える暴論でしょうか？

公園や街路の枯葉が迷惑だと騒ぐ馬鹿商店主、公園の枯葉を現地で堆肥化したり、燃やす事をせずして全てを処分場に持ち去り、木に栄養がないからといって人工的な栄養である合成肥料を法外な値段で散布して金をせしめる悪質な造園業者の方がよほど薄汚い糞だと思うのは私だけでしょうか？

都市、地方都市、農村を含めた土地と緑の回復こそが必要なのです。



▲ こういう場所が犬の散歩コースになりますが、なかなか土や草がないのが難点です。しかし、寺社前で犬の用を立たせるような事をさせないのは常識であり、今回の問題とは別になります。昔はタバコを啜えたり帽子を被ったりすることも非礼とされたのですが、このような常識の一切が消えていきつつあるのが現代なのです。

298. (今回は原稿ストックがありませんので休載です。次回にご期待ください)

ジャーナリスト 中原 孝矩 (元記者)

“現代の十常侍、行政官僚を追放せよ！”

出版のご紹介

新著 「筑後川を道として “日田の木流し、筏流し”」
語り 渡辺音吉・聞き書き 竹島真理 (不知火書房) のご紹介
Tel 092-781-6962

■ 次回への予告 ■ ⑩

	IV 現代の十常侍、行政官僚を追放せよ！ (NO. 11)	2月号
299	絶望的ヒート・アイランドをもたらした無能な官僚国家 VII “芝生とコスモスに見える荒廃 (i)”	20070817
300	不知火海残映 11. 「未定」 吉田 耕一	20020101
301	CO2 温暖化説批判 編集者集者 米本 慎一	20061201
302	公共事業は誰のために行なわれているのか？	20071115
303	公共事業雑感	20071115
304	未定 ジャーナリスト 中原 孝矩 (元記者)	20071201
	*	
	■ 次回への予告 ■ ⑪	